

## ベネデット『マルコ・ポーロ写本』(六<sup>-1</sup>)

訳：高 田 英 樹\*

### Luigi Foscolo Benedetto: Il Milione la tradizione manoscritta (6<sup>-1</sup>)

tr. by Hideki Takata\*

#### キーワード

マルコ・ポーロ、ヨーロッパ中世写本、中世東西交渉史

## 第二章 グレゴワールの改作版 (FG)

### 1. このグループの現在の構成

十四世紀の始めにフランスに持ち来られたフランク・イタリア語の今は失われた一写本が、そこでグレゴワール某によって一種の翻訳を受けた。すなわち、より正統なフランス語に書き直され、別種の文学型式にのっとしてあちこち変えられたのである。この新たなテキストのオリジナルはこれまた失われたが、かなりの確実さでそれを復元するに十分な材料が今に残っている。確実にそれに遡る写本は、私の知るかぎり十五である<sup>1</sup>。これらはさらに異なる四つの下位グループに分けることができ、それをA、B、C、Dと呼ぶことにする(グレゴワールによって作成された原本、あるいはそれから派生し我々の目にその代わりとなっていると映るこのグループ全体を指すには、Gを用いる)。

A<sup>1</sup>. —パリ国立図書館フランス語5631<sup>2</sup>。羊皮紙、20 x 30、87葉、2欄組み、十分に優美なフランス語字体、章の冒頭は交互に赤と紺の2色で丁寧に色付け、章題赤、番号付き、テキストの最初の2葉に二つだけだが凡庸な細密画あり。F.59で転記者が代わり、f.71で再び最初の者に戻っている。2番目の写字生によって転記された部分では一欄35行、残りでは36行。千三百年代後半に属する。

最初に見出しの目次がくる(ff.1a-3b)。F.1a: Ci commencent les rebriches de cest livre qui est appellez le devisement du monde le quel ie Grigoires contrefais du livre de messier marc pol le meilleur citoyen de Venisse creant crist. 「世界の記と呼ばれる書の見出しここに始まる。本書は、クリストを信ずる最良のヴェニス市民マルク・ポル殿の書を、私グリゴワールが作り直した<sup>3</sup>ものである」 F.3cテキストの始まり: Pour savoir la pure verite des

\*たかた ひでき: 大阪国際大学人間科学部教授 <2002.11.18受理>

diverses regions du monde si prenes ce livre et le faites lire. 「世界諸地の全き真実を知るためには、本書を手に取り読ませて下され」。F. 87b: mais n'en fist nul semblant ains monstroit qu'il ne les doutroit riens pour conforter sa gent si comme sages hons qu'il estoit. 「しかし彼は少しもそう見えないどころか、そのとおり聡明な人間らしく、彼らを全く恐れていないことを示して兵を元気付けた」。

この写本は、ベリー公の図書館に収蔵されていた。最後の葉のテキストの後に、削り落とされてはいるけれどもなお公の署名と、「本書はベリー公所有になる」との書き込みを見分けることができる。公の蔵書目録にも記載されている。これからまた、別の時期に「真紅の革に刻印され、真鍮の二つの留め金で」さらに立派に装丁し直されたこと、1416年に「6リーヴル5ソル」の値が付けられたこと、ブルボンヌ公爵夫人に贈呈されたことが分かる。光に透かして見ると、f.3の下部にルイ・ド・ブルージュの紋章の痕跡がなお見分けられる。その紋章は、フランスの楯の青の下地に三本の金の百合によって覆われていた。

ポーチェが出版したマルコ・ポーロのテキストは、このA<sup>1</sup>の一刊本と見なすことができる<sup>2\*</sup>。他に二つの写本が考慮に入れられてはいるけれども、彼の基本テキストはこのfr.5631であった。

A<sup>2</sup>——パリ国立図書館フランス語2810<sup>4</sup>。大量の美しい細密画で研究者によく知られた著名な『驚異の書』*Livre des Merveilles*<sup>5</sup>。大型四つ折り版、羊皮紙、298 x 420、297葉。マルコ旅行記の他にオドリーコ、グリェルモ・ディ・ボルデンセレ、ジャン・ド・マンドヴィル、ハイトン、リコルド・ディ・モンテクローチェ、教皇ベネディクトゥス12世宛タルタル人のグラン・カンの書簡、カンパリクのキリスト教徒への同教皇の書簡、グラン・カンの諸国についてのジョヴァンニ・ディ・コルの報告を収める。つまり、1351年にサン・ベルタン修道院のベネディクト会士ジャン・ル・ロン・ダ・イプルによって編まれた東方旅行記集が、新たなテキストで増補されたものである。ポーロのテキストは最初の96葉を占める。1欄組み、残りの部分同様稀有な美しさのアラベスク模様で豪華に縁取りされている。このポーロの書を飾る84の細密画は、芸術性と図像学的意義の点で同じレベルにはないが、私にはすべて同一人の手になるように見える。しかし作者は分からない<sup>6</sup>。この素晴らしい書は、まずもっておそらくブルゴーニュのジャン豪胆公のために作られたものであろう。その楯の紋章がこの収集本の様々な部分の冒頭の大文字の中に繰り返され、かつては豪華な装丁がそれで飾られていたし、その紋章と肖像がf.226の大きな細密画の中に認められる。1413年に同公から、叔父にして代父だったジャン・ド・ベリーに贈られた。巻の冒頭にベリー公の執事ジャン・フラメルが、類い稀な優美な筆跡でもってその贈呈を記念する長い一文を掲げている：「本書はブルゴーニュ公ジャンが、ベリーとオーヴェルニュの公にして、ポワトー、エスタンペ、ブーローニュ、オーヴェルニュの伯たるその叔父にしてフランス王の息ジャンに贈呈したものである」。贈呈の日付は、公の宝物管理人のロビネ・デスタンペによってその目録の一つに記されている：「本書は、前述ブルゴーニュの殿が1412年1月に前述の殿に贈呈した」。そのいくつかはまさしく絵画と言ってもよい「挿絵」の多さからして、この素晴らしい写本の製作はこの日付から何年も前に

始まったに違いないことは明らかである。しかし、フィリップ大胆王にまで遡る必要はないであろう。

F.1 「マルク・ポールの驚異の書ここに始まる」。この最初の書き出しの後に細密画が一つあり、次いで二番目のより普通に見られる書き出しがくる：「マルク・ポールの、大アジアと大小インドと世界の諸地の驚異の書、ここに始まる。[後略、A<sup>1</sup>の始まりに同じ]」。F.96v: 「[前略、A<sup>1</sup>の終りに同じ]マルク・ポール殿は世界の記とその驚異の書をここに終わる」。目次はない。上に引用した文に含まれているタイトルが、フラメルによって次の書き込みの中に繰り返されている：「本書は世界の驚異、すなわち聖地、タルタル人の皇帝グラン・カアン、インドの国々についての書である」。ゴスラン某——彼は千五百年代後半に王室図書館の係官だった——の二つのメモが、今度は保護紙に繰り返している：「六人の異なる著者を含む世界の驚異の書etc」。

この書の最初の二人の所有者がどうだったかはすでに見た。ベリー公のいつもながらの蔵書票が最後についており、削り落とされているがまだ見える。彼の死にあたって作成された目録では、この作品は125リラ・トゥールーズ貨と評価された。その後——公の娘ボンヌ・ド・ベリーが2度目の結婚で城代家老ベルナルド・ダルマニャックに嫁いだため——その子孫の手に渡り、所有者の中に有名なジャック・ダルマナック、ヌムール公がおり、その楯の紋章と銘が同書のいくつかの個所に加えられているのが見られる。かの悲劇的な最期(1477年)の後、これがピエール・ド・ブルボンに渡り、そのコレクションがさらに後にフランソワ1世のとき王のコレクションにまとめられたのか、それともこの処刑者の他の財産とともに没収されて、その時からルイ11世の所有になっていたのかは分からない。ヌムール公が、ジャン・ド・ベリーの蔵書票の下に、自分の名前とともに、習慣であったごとく同書が送られた先の城の名も記しているため(その言葉は殺ぎ落とされているがまだ読める)、この『驚異の書』は、公が最後に滞在し、そこからバステューの牢獄さらに絞首台へと移されたカルラ城の書籍の中に混じっていたことが分かる。

このfr.2810はポーチェの版に用いられた。

A<sup>3</sup>. ——パリ・アースナル図書館写本3511<sup>7</sup>。大型四つ折り版、羊皮紙、275 x 397、112葉、うち最初と最後白紙。テキストはff.2r-108rを占める。次いで1ページ白紙の後目次(109r-111r)が続く。2欄組み、各32行、見出しタイトル付き、章番号なし、冒頭赤とトルコブルーの地に金文字。テキストの最初の面は3分の2が、クブライの宮廷からのポーロ2兄弟の辞去を描いた細密画で占められている。書体は15世紀末か16世紀始めのもの。単なるコピーというよりは、何かずっと古い美しい写本のまさしく模造品といった感じを外観に漂わせている。この後世の複製がどのような愛書家用に製作されたのか明らかでない。写本が呈する最も古い所有の痕跡は、第2葉の余白を占めているアンヌ・マレ・ド・グラヴィユの楯の紋章と銘句である<sup>8</sup>。しかし彼女はおそらく父親、グラヴィユの提督から相続したのであろう。彼は、後に見るようにマルコの書をもう一冊持っていたし、美しい書籍へのその関心はよく知られていた<sup>9</sup>。背表紙に「世界の諸地」とのタイトルがある。

F.2a: 「世界の諸地の全き真実を知るためには、本書を手に取り、読むか読ませて下され」。F.108b: 「その時以来別の不和が生じたことが知られるようになった。了」。

アンヌ・ド・グラヴィユの所有になる他の作品については、相続によってドゥルフェ家の著名なコレクションに入った後、その収集写本の少なからざる部分と同様に散逸を被ったことが知られる。この写本に付されている覚え書きは、様々なコレクションを経巡ったことを伝えるだけである。17世紀始めにはラヴィーニュ某に所有され、彼は「レネ司教区内ジロデにて」1612年5月29日なる日付を2度記している。1703年3月には——最初の保護紙のフーコーのメモから分かるとおり——「バイヨー教会僧院長にしてオルレアン公閣下の礼拝堂の師」ピブラクの僧院長からフーコーに贈られた。フーコーの楯が装丁に刻印されており、「枢密院委員ニコライ・ヨセフィ・フーコーの蔵書より」との蔵書表が残っている。最後に、現在所蔵されている図書館の創立者であったアルジェンソン公の手に渡った。

B<sup>1</sup>.——大英博物館王室写本19 D 1<sup>10</sup>。大型四つ折り版、羊皮紙、267葉、ほぼもっぱら東方に関する様々な作品の雑録集。『アレクサンデル戦史』*Historia de preliis*の翻訳、『アレクサンデルの復讐』*Venjançe Alixandre*とともに、グラン・カアン宛イノケンティウス4世の使節の報告とオドリコ作品、聖地渡航のための「手引き」、イスラエル史の断片がある。マルコの書はff.58-135aを占める。私には、千三百年代後半のフランス人の筆跡と見える（この収集本の二つの文書、上述「手引き」とプリマの年代記の断片はジャン・ド・ヴィニエの訳であり、1333年以前ではありえない）。2欄組み、各45か46行、冒頭文字色付き、縁飾りと細密画付き。ポーロの話の前半を飾る無名氏の19の「挿絵」は、これも私にはフランス派のものと思えるが、この写本の日付とその由来をさらに正確に確定するための何ら決定的な要素を提供しない。第1葉と58葉の余白に描かれている紋章——金地に羽を広げた砂鷹——も、この高価な書物がそのために制作されたきつと貴顕と思われる人物を特定するには充分ではない。

F.58a「大アルメニア、ペルシア、タルタル人、インド、ならびに世界にある大いなる驚異について語るグラン・カアンの書、ここに始まる。世界の諸地の全き真実を知るためには、本書を手に取り、そこに書かれてある大いなる驚異をご覧下され」。F.135a「何度か男をまるで一羽の鳥であるかのごとく軽々と捕まえて父の前に連れて来たのだが、彼女はよくそうしたものだ。大都カンバルクのグラン・カアンについてと呼ばれる書、終り」。

B<sup>2</sup>.——オクスフォード・ボドリアン図書館ボドリアン写本264（バーナードのカタログの2464）<sup>11</sup>。合本された二つの素晴らしい写本からなる。筆跡と時期は異なるが、たとえば同一の工房から出たのでないとしても、祖国は確実に同じである。これらが一つにされたのは、前述の雑録集の場合と同じ基準による。マルコの東方の書が、オリエントの征服者アレクサンデルに関する一書に付け加えられているのである。前者は現状ではff.218-271vを占める。羊皮紙、大判（290 x 418）、2欄組み各46行、タイトル、頭文字、縁飾り、細密画など、これら豪華版の個々の全ての特長において芸術の不変の喜びとオリジナリティを示す。38の細密画の一つは署名がある：「ヨハネスが私のために作った」。しかしこのデータだけでは確実な特定に充分でない。作品の日付は不明である。これの前にあり正確な日付（1338年写生字の、1344年細密画家の「了」）を備えた『アレクサンドレイド』

*Alessandreide*より古くはないことは明らかで、オクスフォードの『マルコ・ポーロ』は14世紀最後の数十年を考えますが、断固として15世紀に置こうとする者もいる。制作は、フランスの影響は否定し難いが、フランス産と認めることはできない。多分フランドル、おそらく英国領で制作されたものであろう。

F. 218: [略、B<sup>1</sup>の始まりに同じ]。F. 271r: [略、B<sup>1</sup>の終りに同じ]。

保護紙と装丁の裏に様々な所有者の痕跡が残っている。エドワード4世の舅のものだったことがある。すなわち、「リシャール・ド・ウイドヴィユの閣下、リヴィエルの君主、いとも高貴なヤルティエ教団の団員の一人」で、「同君主は本書を恩寵の1466年の年初の日、いとも徳高きエリザベス女王戴冠の第5年聖モアの日の前日にロンドンにて入手した」。その後トーマス・スミス、ジャスパー・フィロル、「兵士」ジル・ストラングウェイズの名が続いている。ポドリヤン図書館には1598年と1605年の間に入っているが、おそらくポドレー自身から寄贈されたものであろう。

B<sup>3</sup>. —ベルン市図書館写本125<sup>12</sup>。286葉からなる広範な収集本で、マルコの書(ff.1-93r)に始まり、マンデヴィル、ハイトン、オドリーコ、ポルデンセレ、リコルド、グラン・カアンと教皇の書簡、G.ド・コルの報告等、お馴染みの東方ものを収める。このうち最後の五つはイプルの僧院長ジャン・ル・ロンの前述の翻訳にある。美しい羊皮紙四つ折り版、きちんとした丁寧な文字、2欄組み、素晴らしい花模様の縁飾りつき(第76葉は上から下へほぼ半分切り取られているが、これはきっとこのアラベスクの素晴らしいさのためであろう)。研究者はこれを14世紀に置くことで一致する。しかし私には、写生字も無名の装飾師も15世紀の前半に属すること疑いがないと思える。

最初の目次(1a-3d)は次のように始まる:「インドの地にある大いなる驚異を語るグラン・カアン、ここに始まる」。F.3d: [略、B<sup>1</sup>の始まりに同じ]。F.93: [略、B<sup>1</sup>の終りに同じ]。同じ筆跡で、次の声明が続く:

Veez cy le livre que Monseigneur Thybault chevalier seigneur de Cepoy que Dieux absoille requist que il en eust la coppie a messere Marc Pol bourgeois et habitant en la cite de Venise. Et le dit sire Marc Pol, comme tres honnorable et bien acoustume en pluseur regions et bien morigine et lui desirans que ce qu'il avoit veu fust sceu par l'univers monde et pour l'onneur et reverence de tres excellent et puissant prince Monseigneur Charles filz du Roy de France et conte de Valois, bailla et donna au dessusdit Seigneur de Cepoy la premiere coppie de son dit livre puis qu'il l'eut fait, et moult lui estoit agreables quant par si preudomme estoit avanciez et poetez es nobles parties de France. De la qualle coppie que le dit messere Tyebault sire de cepoy cy dessus nommez aporta en France, messier Jehan, qui fust son ainsne filz et qui est sires de Cepoy après son decres, bailla la premiere coppie de ce livre qui oncques fut faite puis que il fut apporte au Royaume de France a son terschier et redoubte seigneur Monseigneur de Valois. Et depuis en a il donne coppie a ses amis qui l'en ont requis. Et fu celle coppie baillee du dit sire Marc Pol au dit Seigneur de Cepoy quant il ala en Venise pour monseigneur de valoiz et pour madame l'Empereris sa fame vicaire general pour eulz deuz en toutes les parties de l'empire de Constantinoble. Et fut fait l'an de

L'incarnation seigneur Jhesu Crist mil trios cent et sept ou mois d'aoust.

「この書は、セポワの君主騎士ティボー殿下が、神よ彼を赦し給わんことを、ヴェニズ市のお方にして住人マルク・ポル殿に所望なされたコピーである。かのマルク・ポル殿は、いと誉れ高く、いくつもの地の風俗習慣にいたく通じた御方である。彼は、自ら目にしたことが全世界に知られるよう望み、またフランス王の息にしてヴァロワの伯、いとも優れて猛き皇子シャルル殿下に対する栄誉と崇敬のため、その作成後その書の最初のコピーを、上述セポワの君主に授け贈ったのであった。また彼は、かくも高貴のお方のためにフランスの貴き地に伝わりもたらされることを、大いに歓んだ。上にその名を揚げたセポワの君主ティボー殿下によりフランスに持ち来たられたそのコピーから、その長子でありその死後セポワの君主となられたジャン殿下は、それがフランス王国に持ち来たられて後かつて作られた同書の最初のコピーを、そのいとも親愛なる畏れおおき君主、ヴァロワの殿下に与え給うた。その後彼はまた、それを所望する友人たちにそのコピーを与えた。このコピーがマルク・ポル殿から上述セポワの君主に贈られたのは、彼が、ヴァロア伯とその妃であるお后のために、コンスタンティノーブル帝国全土におけるこれらお二方の総代理としてヴェニスに赴いたときのことであった。これは、我らが主イエス・クリスト生誕一千三百七年八月の月に作られた」<sup>13</sup>

同書はジャック・ボンガール（1612年没）のコレクションの一部をなしていたことがあり、彼はメモを記している：「ボンガール、ド・シュベルヴィユ殿の好意により入手」。

ジンナーは、その『カタログ』中に導入部の伝記にまつわる章を再録している(pp.419-456)。

B<sup>1</sup>——パリ国立図書館フランス語5649（旧10270A）。羊皮紙136葉からなり、うち最初の2葉は現在AとBと記され、残りに1から134までの番号が振られている。最初の2枚と最後の3枚は白紙。最後の葉の状態からして、赤のモロッコ皮にフランスの楯の紋章の付いた今なおそのままの美しい装丁が施される前は、おそらくしばらく表紙の役割を果たしていたと考えられる。写字生は同書の末尾に自分の署名を記している：「ベルトラン・リカールこれを書けり」（Cordier-Yule, II, 536にあるごとくピカールではない）。小型版(170 x 242)、1欄組み、ページ31行、半斜字体だがある種の優美さがなくもない、芸術的装飾はほとんどない。二つの大きなアラベスクがf.1rとf.5rの余白の二つの書き出し、つまり最初の目次とテキストそのものの書き出しを飾っている。そこの二つの冒頭文字は金地に大きく飾られている。章の他の冒頭文字は赤か紺でかすかに色が付けられているが、おそらく写字生自身の仕事であろう。

F.1r：「この書はセポワの君主騎士ティボー殿下が・・」。以下、ほんのいくつか軽微な異なりはあるが、B<sup>3</sup>のところまで引用した声明がそっくり続く。次いで赤でテキスト内の見出しとして：「インドの地にある大いなる驚異をここに語る」。さらに見出しの始まりが続く：「インドの地にある大いなる驚異を語るカタイのグラン・カアン」の書、ここに始まる」。F.5v：[略、B<sup>1</sup>の始まりに同じ]。F.131v：[略、B<sup>1</sup>の終りに同じ]。

この稿本の作成者ベルトラン・リシャルは、長らくオルレアン公シャルルに仕えていた（もちろん1452年から1461年まで）。1454—5年に公のために天文学の本とペトラルカの

フランス語訳を転記している。1457年には公爵夫人の一写本に公の歌謡をかなり挿入している。1460年1月23日ブロワで、「前述の殿がロワニーの姫に贈ったバラードの本を書いたことにより」2スクードの受領書を公の会計係に提出している。マルコの書のコピーもこの詩人の命により実行されたということもありえないことはない。最初の頭文字の中に、フランスーオルレアン紋章が描かれている。

シャルル公の蔵書の今に伝わるリストの中に見当たらないことからして、ほとんどすぐに彼の兄弟、アングレーム伯ジャン・ドルレアンの手へ渡ったにちがいない。ジャンの死（1467年）に際して作成された二つの目録に記載されている：「羊皮紙、通常文字、グラン・カアンの物語、第3葉*Ci nous devise*<ここに記す>と始まり、最後の葉に赤字で*scripsit hoc*<これを書けり>に終わる」。この詳細から、まずもって確実に現フランス語写本5649と同定することができる。二つの目録の一つはこれを欠本としている：「同様にジャン・ギーに贈呈された」。しかし、ジャン・ギーに贈呈された書はジャンの息子シャルル・ド・アングレームの手へ渡ったことが文脈から分かる。最後の葉の中央に記されている署名「シャルル」は、おそらくこの息子のものであろう。

この稿本は、トロサの大司教シャルル・ド・モンシャル、そしてレームの大司教モーリス・ル・ティエに所有されていた。第1葉上部にこれら二つのコレクションにあった番号がまだ残っている。ル・ティエから王立図書館に寄贈された。

これは、ポーチェの版に用いられた。

B<sup>5</sup>。——ジュネーヴ大学公共図書館フランス語154<sup>14</sup>。美しい紙写本、おそらく15世紀、21 x 29、外側は赤い革、内側は羊皮紙が張られた板の装丁。明らかに欠落があるが、同じグループの稿本と対照すると1枚だけである。紙は近代の筆跡で番号が振られ、現状では164枚。1欄組み、頭文字赤、字体良好。

前掲B<sup>3</sup>の声明とともに始まる：[略]。Cc.1v-7rに章目次。テキストの始まり：[略、B<sup>1</sup>の始まりに同じ]。結び：「双方宮殿の広場に登場すると、互いに腕を掴み、取っ組み合い、あちこち打ち合いして、この闘いは長く続いたが、一方が勝利を占めることはできなかった」。

ポーロのどの研究者にも知られていなかった。

B<sup>6</sup>。——パリ国立図書館フランス語Nouv. Acq. 934。1897年に「フランス語古写本断片集」のタイトルで編まれ、様々な由来の切れ端から構成される収集の一部をなすマルコの書の一連の断片。哀れな状態になった11のかけら、明らかにカバーとして用いられていたいくつかの紙の残り、外側になっていた部分では古い折り目の痕が残ったところは全く、あるいはほとんど読めない。いたるところに裂け・黒ずみ・色あせ・穴あきあり。綺麗な羊皮紙写本の残り、私見によれば千三百年代後半の作、20 x 29、2欄組み各40行、フランス人の筆跡、タイトル赤、番号付き、頭文字色付き、ある種の美しさのある絵付き、長い線の折り返しで飾られている。余白により後代の筆跡の書き込みあり。

ポーロの研究者に知られていない。

B<sup>7</sup>。——パリ国立図書館Nouv. Acq. Lat. 1529<sup>15</sup>。ラテン語およびフランス語の古い断片と記録の収集本の第4番。2葉だけからなり、1883年に寄贈されたもので、ぼぼまずカヴ

ァーとして用いられていた。第1葉表と第2葉裏は大部分読めないが、内側はいくぶん明瞭である。美しい羊皮紙本の残り、14世紀、2欄組み、各30行、タイトル赤、頭文字色付き。現状では176 x 275だが、余白は大きく切り取られている。

C<sup>1</sup>.—ストックホルム王立図書館写本XXXVII。小型四つ折り版羊皮紙、100葉、1欄組み、ページ32行、タイトル赤、番号付き、筆跡良好、確実に千三百年代前半のもの。章の大きな頭文字は第XVI章の後中断されている。ごく新しい筆跡で余白にいくつか注記があり、最後の葉の裏に世界地図付きで宇宙についての考察がある。

書き出し：「世界の諸地の全き真実を知るためには、本書を読むか読ませて下され、さすればそこに書かれてある大いなる驚異をご覧になれましょう」。結び：「アルゴンが我が兄弟アバガの息子だというのはそのとおりである。もし誰かが彼に言ったなら」。

第2葉がBocata mult grant<とても大きなボカータ [ブカーラ] >、最後の葉がiluec dist<そう言った>で始まることからして、1411年のルーヴルの書籍カタログに次のように書かれているものと同一視される：「マルクス・パウルス、挿絵なし、フランス語、楷書体、第2葉vocata moult grantに始まり、最後の葉はilec dist-ilに始まる、白い革のカヴァァー、二つの真鍮の留め金付き」。1411年にこのように記載された本は——1413年と1424年の王立図書館目録にもやはり現れるが——シャルル5世がその統治の最初に所有していた5本の「マルコ」ものの一つであった。同書は、1424年以後はベドフォード公の所有に帰し、フランスとイギリスに分散したルーブル図書館の書籍の多くと同じ運命をたどったにちがいない。同書のその後の変転については、書自体にいくらか情報がある。最後の葉の表、上に引用した「結び」のすぐ後に、「オヌフルに住むシモン・デュソリエのために」と書かれている。オヌフル市古文書館に提出された1499年11月17日の公文書に、シモン・デュ・スリエが市の‘平民’と住民の検察官—市長として現れる。第1葉の署名Pa. Petaviusは、これがどうしてスウェーデンに至ったかを説明してくれる。パオロ・ペタウによって収集された後、息子アレクサンデルによって売却され、スウェーデン女王の図書館の宝物を豊にすることになったのである。王冠と王国を捨てたとき、女王がこれを持ち去らなかったとすれば、それはおそらく自分用の図書の中にすでにもう一本の「マルコ」、多分これよりは著しく古くはないが美術的観点からはこれに劣らず魅力的なもう一本があったからであろう。すなわち、今ヴァチカン図書館にあるRegina 1846である。

ノルデンスキョルドは、1882年にこれの素晴らしい写真複製を200部作らせている。

C<sup>2</sup>.—パリ国立図書館フランス語Nouv. Acq. 1880。紙、180 x 255、149葉番号付き、うち最初白紙、字体乱雑で不揃い、確実に非専門写字生、頭文字は別の筆跡、これもごく凡庸。15世紀末か16世紀始め。

F.2r：[略、C<sup>1</sup>の始まりに同じ]。F.149v：[略、C<sup>1</sup>の終りに同じ]。

A<sup>3</sup>と同じく、この写本はアンヌ・ド・グラヴィユの所有になっていた。F.1vに「故將軍閣下の相続人アンヌ・ド・グラヴィユに、518年」とある。その後ドゥルフェ家の図書館に収められた。ドゥルフェ家の楯の紋章が装丁に刻印されている。1870年国立図書館に購入された。

C<sup>3</sup>.—アルスナル図書館写本5219<sup>16</sup>。美しい羊皮紙本、206 x 298、170葉、うち最初と



最後白紙(第2葉から始まって最後から2枚目までに鉛筆で新たな番号が振られている)。保護紙の後の最初の8葉は別の作品のプロローグによって占められているが、その本文はない(フランスのごく初期の歴史に関する古い文書の訳)。次のように題されている:「翻訳者、神学の修行を積んだ学生ロベール・フレシェール師による本書の序文」。これがため、マルタンはその「カタログ」中に次のように書いた:「ロベール・フレシェール訳マルコ・ポーロ旅行記」。しかし、この序文とポーロのテキストとの間には何の関係もない。ロベール・フレシェールは、文学活動に関しては私に分かったわずかなことによるかぎり、16世紀の始めに属する。彼の作品がそのために作成されたごく狭い範囲を越えることはありえなかったであろうと思えることからして、このフレシェールとマルコ・ポーロのなんとも奇妙でもちろん偶然の同じ一つの写本への組み合わせは、そのモデルがルーザ・ディ・サヴォイアかその‘取り巻き’の誰かの図書館から由来したことがありえると考えられる。このロベール、「芸術の師にして優秀な神学生」は、アングレーム家の親族の一員であった。

各ページ1欄組み、丁寧な筆跡、頭文字はとても綺麗な金と色付き、ほとんどどのページにも1枚かときに2枚の細密画。細密画は全部で197(大きさは大部分葉の約3分の1)、技術的な差はさほどない、画想はいささか素朴だが、しかし何らかの注目に値する。

書き出し: [略、C<sup>1</sup>の始まりにほぼ同じ]。結び: [略、C<sup>1</sup>の終りに同じ]。

CA.ピカールの蔵書に属していた。ピカールの写本のかなりが、マルコの別の一本の所有者であることをすでに見たN.J.フーコーのコレクションから来ていることからして、この写本もその収集に属していた可能性もある。1780年に489リラ19シリングでポールミー男爵に購入された。

C<sup>4</sup>。——ヴヴィー市博物館蔵の断片。千五百年代末の一帳簿の装丁に用いられていた羊皮紙2葉のみ。したがって現状ではとても痛んでいるが、千三百年代のきちんとしたゴチック文字や章の冒頭の赤の大文字や規則的な行取り(ページ26行)に、ある種の古い優美さの痕跡を見せている。サイズは小型、155 x 200、各章タイトルと番号付き。

1901年にミュレによって出版された。<sup>17</sup>

D。——ブリュクセル王立図書館写本9309。羊皮紙、おそらく14世紀半ば頃作、マルコの書(ff.1-76)の他に『プレート・ジャンニの書簡』*Lettera del Prete Gianni*をも含み、巻の最後に第CCI章として付け加えられている。略字を多用した極めて密な筆跡や装飾の極度の少なさが示しているごとく、明らかに誰か学者用であろう。頭文字は装飾され、最初の頭文字の中に囲まれて、風景を背景に白い髭の老人を描いた唯一の細密画がある。渦巻き模様の中に、*Lizies ou livre sire Marc Pol* <マルク・ポル殿の書を読まれたし>とある。

章目次の前に:「イエスキリストを信仰するヴェニス市民マルク・ポル殿の書と呼ばれる全見出しの一覧、ここに始まる。本書には世界のいくつかの地域の沢山の大きな驚異が章ごとに順を追って述べられ収められている」。テキストの始まり: [略、B<sup>1</sup>の始まりに同じ]。終り:「かのアルゴンは、当然その権利があることとて、統治すべく全軍を率いて自分の国に帰った。マーク・ポル殿の書終わり。プレートル・ジャンからローマ皇帝フェデルク[フェデリコ]宛の、彼が求めたとおりその国の有様について述べる書簡の内

容が続く」。

15世紀には同書はすでにブルゴーニュ公の図書館に入っていた。目録には、「マルク・ポル殿の書と題された赤い革の装丁のもう一書、第2葉は図版の後quant les deux freres furent<二人の兄弟が・・た時>、最後の葉はet chatiezと始まる」と記載されている。これは、今我々が取り上げている稿本であること疑いない。第2葉と最後の葉はまさにそのとおり始まっている（カタログのet chatiezは、もちろん我々のテキストにあるごとくet sachiez<またご存じありたい>の誤り）。

カタログには、今なお所蔵されているこれとは別の写本として、「赤い革の装丁のもう一つ的大型本、真鍮の二つの留め金、挿絵入り、タイトル<マルク・ポル殿の書>、第2葉にquant les deux freres furentと始まり、最後の葉はse vous garde qui vit et regne sans fin amen<常しえに見そなわし治めている御方のご加護のありますよう、アーメン>と終わる」が挙げられている。<挿絵入り>というが、<挿絵>と呼べるほどの飾りは一つしかないことからして、確かに我々のDとは合っていない。しかし、二つの写本が第2葉の最初の言葉と最後の葉の最後の言葉が同一だとすれば極めて珍しい例であろう。すでに述べたごとく、マルコのテキストにプレット・ジャンの書簡が続いている稿本9309は、全体の最後はまさしく上と同じ言葉で終わっている：「常しえに見そなわし治めている御方のご加護のありますよう、アーメン」。同じ写本であることは間違いない。

Ms. 9309にはパリ国立図書館の印が捺してある。1746年と1794年の二度にわたってベルギーの写本がフランスによって持ち去られ、その後1769年と1815年に返還されたことは知られるとおりである。

## 2. 同定されないあるいは失われた写本についての証言

上に挙げた写本は、もっとはるかに広範に普及していたうちの生き残ったものの痕跡にすぎない。

ブルゴーニュ伯爵夫人マオーは1312年にマルコの書の豪華版を作らせている。「グラン・カンの物語を書き訂正するためと羊皮紙のために、エスダンの3人の書き手に39ポンド。その物語に挿絵を描くためと、賃料とカバーのために3ポンド4ペンス」支払われたことが、その年の「館の勘定書き」から分かる。その4年後アルトワの同盟軍がエスダンの城に侵入して美しい書籍や宝石を押収した時、その中に「グラン・カンの生涯の物語」もあった。

書物を愛し読書家だったマオーは、マルコを読むことに最も生き生きとした興味を覚えていたにちがいない。明らかにその影響であろう、彼女が信頼を置いていた人物、アラスの司教ティエリー・ディルソンも同書のコピーを所望し、1315年にウオン・ル・メロニユールに「グラン・カンを書き記す労に対して38ポンド」支出している。<sup>18</sup>

シャルル5世が統治の初期にルーヴルの城の塔の一つに集めた素晴らしいコレクションの中に、マルコの稿本が五つあったこと、その一本が今に伝わる写本の一つC<sup>1</sup>と同定しうることはすでに述べた。残りの四つについては、ずっと早くからいかなる痕跡も失われ、様々な目録に繰り返されているごく微かな記録しか残っていない。<sup>3\*</sup>

ベリー公所有になる書の中に、前述した二つ(A<sup>1</sup>とA<sup>2</sup>)の他にもう一本ポーロの作品のあったことが知られる：「<聖地、グラン・カン、インド、タルタリアの世界の驚異>と題されたフランス語本。ブロック体で書かれ、最初と数箇所挿絵。第2葉の書き出し *poys de bonne citez*。刻印のある赤い革のカヴァー、二つの留め金と絹布。同書はこれの後に書かれているミサ典書とともに閣下がパリ在住の書籍商ノー・ド・モンテ師より1412年10月に購入したものである。両書合わせて計100エキュであった」。そしてロビネの覚え書きから、その本がパリ「奉行」ピュール・デゼサールに贈呈されたことが分かる。これは、マルコ・ポーロの書そのものかそれともマルコの作品を含む文選集であろう(引用されている第2葉の書き出しは、記載者の読み誤りでなければ、私の知る限りのポーロのテキストのどれとも対応しない)。

1477年、「ディジョンのブルゴーニュ館宝物庫の」シャルル豪胆公の書の中に、「マルク・ポールと呼ばれる」一書があった。この稿本も、我々のDと同一視すべきか、それとも別の一写本のことであろうか。

コニャック城の図書館にはシャルル・ダングレーム死亡時に二つ、「フランス語版世界の驚異の書、羊皮紙に手書き、真紅のピロードのカヴァー、二つの留め金、一つは前述の殿(つまりシャルル伯)の楯の紋章、もう一つは前述妃殿下(つまりルイズ・ド・サヴォイア)の楯の紋章入り」と「インドの書もしくはグラン・カンの書と呼ばれる一書、羊皮紙手書き、金糸の布カヴァー」があった。これらにマルコの稿本を認めることができるが、肝心のデータが欠けているため、前に挙げた写本のどれかと確実に同定することは不可能である。

1544年のプロワの書店の目録には次のものが記載されている：「羊皮紙に黒のピロードカヴァーのもう一書、挿絵入り、内にく新たに発見された島々についてのヴェニス人マルク・ポールの書」のタイトル。これがどれに当たるのか私には特定できない。この奇妙なタイトルは、いずれにしても何らかの混乱か、あるいは少なくともアメリゴ・ヴェスプッチか他の近代の旅行者の書との連想によるものにちがいない。

ジャン・ド・イプルの蔵書の中には、自ら『サン・ベルタン修道院年代記』*Chronicon monasterii S. Bertini*で述べているとおり、フランス語マルコ・ポーロの一本があった：「マルクス・パウリは・・それら地域の多くの驚異を目にし、後にそれについてガリアの俗語で書を編んだのだが、我々はそれの類書をいくつか所有している」。我々がすでに東方研究の分野における功績をたまたま想起したこの仕事熱心なベネディクト会士にとって、かの作品が親しいものであったとしても不思議ではない。事実、1351年にハイトンとオドリーコの書をアジアもの他の二つの小品とともにラテン語からフランス語に翻訳したのは彼であった。その文選集は、後に様々に増補されてかなりの成功を収めた。この年代記の中で彼がマルコの書を取り上げたやり方は、テキストを前にすることなく記憶に頼って再現するというものであったことを示しているように思える<sup>19</sup>。教皇グレゴリウス10世となった人物を指すのに用いられている、Teald<テアルド>ではなくTeaboni<テアボニ>という形(もちろん主格Teaboから)は、我々が今取り上げているグループに特徴的な形Ceaboと同一視すべきものである。

### 3. パリの二つの断片

このグループ内部の検討に移る前に、断片B<sup>6</sup>とB<sup>7</sup>について何らかの説明がさらに必要だと思われる。これらの特別に劣悪な状態からして、読者がそこに戻ってくることはまずありえないだろうからである。

B<sup>7</sup>は、これもひどく痛んでおり解説は容易ではないが、同じ [パリ国立] 図書館に所蔵されているテキストB<sup>4</sup>を前において、必要なところを補ったり最も困難な箇所を参照したりすれば、どんな読者にも近づきうるものとなる。これに対してB<sup>6</sup>は、ポーロのテキストに特に通じていず、生き残っているごく微かな痕跡を直感的に補うことができない者にとっては、その解釈はしばしば絶望的なまでに困難を極めるにちがいないと思われる。したがってここはその転記を掲げておくいい機会であろう。

同断片は、66から76までの番号が振られた11片からなる。が、75と76の番号のものは同じ紙の一部としてそれぞれ73と74のものに加えられるべきであるから、実際は9枚である。<sup>4\*</sup>

### 4. ティボー・ド・セポワのオリジナル

B<sup>1</sup>・B<sup>2</sup>・B<sup>3</sup>に記されている前に引用した声明は、このグループの起源にとって極めて重要である。

どのような根拠があるのか、個人的な記憶から取られたのかそれとも間接的な情報からか、またマルコの何らかの稿本がそこから提供された何かもっと短い覚え書きの文学的な発展なのかどうか、我々には分からない。しかしこれは十分に古いものにちがいない——ジャン・ド・セポワ<sup>20</sup>をなお生存中として語っている——また筆者はセポワその人かその主君ヴァロワ伯に十分近い人物のようである。これの本質的内容を受け容れてはならない理由はない。すなわち、ティボー・ド・セポワが1307年にヴェネツィアでマルコの書の一コピーを手に入れたこと、そのコピーの一コピーが息子ジャンからシャルル・ド・ヴァロワに進呈されたこと、フランスで知られる同作品の最初の諸稿本がこのようにして誕生したこと、である。

しかしながら、かの声明が含んでいる細部を全て余りにも文字通りに受け取ることは注意しなければならない。

この文章自体が何らかの見直しを必要とする。前掲3写本とも、自分の作品のコピーをティボー・ド・セポワから所望されたマルコは、*bien acoustumè en pluseur regions et bien moriginé*〈いくつもの地によく通じ教養高い〉こととて、ごく慇懃にそれに応じたと言う。これは、疑いもなく誤った表現である。〈いくつもの地〉という句がくよく通じ〉と奇妙な風に継ぎ合わされてされている。これはおそらく次の行「目にしたことが *l'univers monde*〈全世界〉に知られるよう強く望み<sup>21</sup>」を踏まえた訂正であって、この〈全世界〉が大げさなまでに野心的だと注記者には思えたのであろう。

この改作版が一人の王侯に進呈されたことと、今しがた一瞥したように転記者たちによって勝手に訂正された蓋然性は、この声明がマルコに口にさせている優雅で丁寧な賛辞に重みを与えることができるか、またどの程度か、おぼつかなくさせずにはおかない。「彼は、かくも貴きお方のためにフランスの高貴の地に伝わりもたらされることをとても喜ん

だ」という。これは、ヴァロワの伯に対するマルコの実際の賛辞を映しているのかもしれないし、自分の主君に対するジャン・ド・セボワの無邪気なお世辞なのかもしれない。

いずれにしても、この「由来証明書」が我々に提供するデータの一つは空想的なものである。すなわち、ティボーはマルコから「それを作成した後その書の最初のコピー」をもらったのだという。したがって、「それは我々が主イエス・クリストの化身の1307年8月に作成された」と言うとき、この言葉からだけでは、それが単に一つのコピーの日付のことかそれとも作品が編まれた日付のことか、我々には決めようがない。一方、ティボーによってフランスに持ち来られたテキストそのものにも、同書は1298年に編まれたとはっきりと書かれている。もちろん、1307年によく何か我々には知らぬ理由によってマルコが、ルスティケッロに作らせた版を見直して自分の作品の真正版を作り、それを自分の決定版テキストとして写字生たちに手渡した、と想定することはできる。しかし、ティボーの稿本は——これはその派生本から復元することができるが——そうした假定上の改訂版の最初のコピーでもありえない。余りにも欠陥が多いことからして、ポーロの直接の監督のもとに行われたのではないことは確信できるからである。したがって、どうしてもかの文章に対する信頼——つまりティボーが直接著者のところに赴き、彼から一本を進呈されたこと——を否定したくなければ、その求めに応じるためにマルコが、書籍商売が誰か個人の好奇心のおかげですでにヴェネツィアに存在していた多くのコピーの一つを手に入れた、と考えなければならぬ。

ティボーが1307年に実際ヴェネツィアに滞在していたことは、他の記録から広く証明されている。「ロマーニャ」問題に関わる政治的軍事的な長い滞在で、フィリップ美王の兄弟シャルル・ド・ヴァロワが、妻カトリーヌ・ド・クートニーの夫としてコンスタンティノーブルの帝国に所有していると主張していた権利を有効なものとするため、そこに彼を派遣していたのである<sup>22</sup>。しかしながら、彼のマルコとの直接の関係は、これまたその息子ジャンか、それとも我々が今検討しているかの文章を書いた名の知れぬ筆者によってつむぎ出された、後の空想かもしれない。おそらく、ティボーが手に入れた稿本に写字生が、慣わしどおり自分の仕事の最後の日付を書き記していたのであろう。そしてその日付が、うっかり写字生ではなく著者のものとされたのであろう。それが、ティボーのオリエントへの出発の時期と一致していたため<sup>5\*</sup>、その結果この武人がまさに最初の稿本を手に入れたと結論されたのである。

逆に、この文章にマルコの署名のようなものを見て取る者もいた。その言葉の一つ一つに絶対的な価値が置かれ、これが載っているテキストに議論の余地なき信憑性と、他の全てのテキストに対するそれに劣らず議論の余地なき優越性が授けられたと信じられた。そして、確実により古いものであるFの示す純粋性と直接性という明白な性格については、後に放棄された下書きとしてのジェノヴァ版と見え、それに対して、フランスのシャルルに贈呈するために用意されたヴェネツィア版が決定稿として対置されたのである。1850年ポーリン・パリスは、不当にもあまりにも無視されてきたこの第2のテキストの出版を呼びかけた：「最初の編纂の性急さから生じた分りにくい文章や矛盾は、マルコ・ポーロ自身の最終的決定のもとに置かれた。こうして、今風に言うとか著者によって改訂され、

最初の版の誤りがすっかり取り除かれたと言える第2のテキストが確立されたのである。そのテキストがとても明快で平易な文体で書かれており、まだ刊行されたことがなく、大いにそれに値することは少なくとも確かである」<sup>23</sup>。パリスがほのめかしていたのはもっぱらこの第2版の文体の優越性のことであった。ところが、このより新しいテキストがいくつかの点で内容的にもより優れていると見えたものだから、ポーチェはそれが言葉のもっと広い意味での改訂版をなしていると確信した。すなわち、良好なフランス語での編纂はマルコの考えの最終的で決定的な形であり、由来を明言しているかの声明は、他の全てのものに対する反論の余地なき権威をそれに与えている、と。そこで、マルコの真の言葉を学問に提供でき、5世紀に及ぶ「いわれなき忘却」を埋め合わせることができるかと熱狂的に確信して、パリスのような中世学者——彼への信頼を誇張しているが——によって表明された期待を実現せんとして、自分の刊本の表紙にはっきりと次のように掲げた：「マルク・ポール自身によって校閲され、1307年彼からティボー・ド・セポワに進呈された書の最初の編纂物を提供する」。ポーチェを導いていたこの確信はその注釈の中に露呈しており、Fとの異なりをことごとく適切な訂正として説明しようとする。しかしそれはとりわけ、彼の版の理論的拠りが論議の対象となったとたんに、その批判に対して彼が応じた分の論争に現れた。澄明な良識でもってG.ビアンコーニは、ポーチェのテキストを地理学協会によって刊行されたテキストと対校するだけで、この新しいテキストの、ただ単により古いテキストの誤解として説明でき、したがって著者にその責を帰し得ないいくつかの箇所を浮き彫りにした。彼は、ティボー・ド・セポワに仕えていた誰か書記が、主人からフランス・イタリア語テキストにちょっとした言語の衣装をほどこす仕事を任されたのだが、無知か軽率から自分の仕事の限界を踏み越え、遺憾な改竄の責を負ってしまった、と推測した<sup>24</sup>。これに対する回答の中でポーチェは——P.パリスの権威とかティボーのテキストのより優れた言語的美しさといった、いくつかの奇妙に些細な理由はさておき<sup>25</sup>——かのいわゆる「由来証明書」と、彼の言うヴェネツィア版にはFと比較してより優れた、つまりマルコの考えにきつとより叶った個所が現に存在するという以外、自分の選択の正当化を持ち合わせていない。

この最後の理由は実際に重みをもつ唯一のものであり、それを知らなかったというのはビアンコーニの側の手落ちであった。Fと対校すると、確かにティボーのテキストは時によいヴァリエーション、より好ましい読みを提供することがある。

しかし、ポーチェの仕事を単なる不幸な試みとし、ポーチェービアンコーニ論争を実りなき争いにしてしまったのは、まさしくFとFGという二つのタイプの対照に限ったことである。Fr.1116をさらに正確に解釈し、マルコがティボーに与えたであろう稿本をその派生本<全て>に基づいて復元することによって、これら二つのタイプをその純粋な形において対照すべきであったということはさておこう。しかし、これら二つのタイプ以外に、ポーロの作品の広範な写本の伝統は、他にも無視し得ないものを提供するし、Fがジェノヴァの獄で編まれたオリジナルであると直ちに同定することはもちろんできないことはすでに述べた。可能ならばFGと対照させることが必要な基本的モデルは、Fも対照されるべきものと同一なのである。

事実の厳格な基盤に立って作業を進め、先に挙げた校本が由来する今は失われた原本を正しく復元しようとする者は、ティボーがヴェネツィアで手に入れたコピーに直接たどり着くわけではなく、その改作版に至るのである。すなわち、モデルとしてFに似たテキストを想定する版にたどり着くのである。ヴェネツィアの稿本をF<sup>1</sup>、今検討しているグループの祖本をFGとすると、FGとF<sup>1</sup>との関係にとって、ビアンコーニによってポーチェのテキストとルーのテキスト[F]との間に認められた関係が全般にわたって有効である。言葉はより適切でより純粹であり、作品はある点でより秩序だった様相を呈しているが、余りにも恣意的な手直しが多いことを咎めるべきであり、改作者は自分が理解できないところを省略したり変えたりする権利を余りにも行使し過ぎている。F<sup>1</sup>はしかし——FGを通じても見られるごとく——Fの一兄弟である。一つの同じテキストのけっこう近い二つのコピーである。いくつかの点で一方のほうが良く、他のいくつかでもう一方のほうが良い。当然ながら、これらが由来する元のオリジナルに対して、幸いなことに同じ誤りと同じ欠落を持たない。互いに補い合い、訂正し合う。

B<sup>3</sup>・B<sup>4</sup>・B<sup>5</sup>の声明はしかしながらすでに、少し注意深い読者なら、正しい道に導くはずのものであった。ラングロワは、彼がB版と呼ぶこれの十分な言語的正しさを認めた後、慎重に付け加える：「マルコからティボー・ド・セポワに贈られた稿本は、そこではフランス語でなかったことは十分に確実である。ティボーは、現地ヴェネツィアでかおそらく帰国後フランスで、誰かにそれを〈彼に合うように〉させたのであろう。〈ティボーが自ら持ち帰った写本をすぐにシャルル・ド・ヴァロワのもとに届けることをしなかったのは、まさに時間を要するこの手直しの必要のためであったことは疑いない〉。その写本は彼自身が最後まで手元に置いていた。その息子ジャンは、フランス宮廷のセポワの師やパトロンには、彼らのためにより好ましく分かりやすいフランス語に着せ替えられたいくつかのコピーしか配らなかつた」。<sup>26</sup>

我々の写本の一つA<sup>1</sup>のタイトルは、今まで注意されてこなかったが、この問題に関して無意味でない要素をはらんでいるように私には思える：「ここに本書の見出し始まる・・本書はクリストを信仰する最良のヴェニス市民マルク・ポル殿の書を私グレゴワールが contrefais〈作り直した〉ものである」。このタイトルは、Dのオリジナルモデルにもあった。この場合は見知らぬグレゴワールの名は削られているが、文はほとんど手つかずである：「ここに、イエスキリストを信仰するヴェネツィア市民マルコ・ポーロ殿の書という本書の全ての見出しの一覧が始まる」。A<sup>3</sup>はA<sup>1</sup>から独立しており、その個所を残しているものの、恣意的に改められている：「ここに世界の記と呼ばれる本書の一覧が始まる、本書は良き市民でありいと良きクリスト者であるマルク・ポル殿の書を私グレゴワールが contrescrit〈書き直した〉ものである」。〈作り直す〉に対して後のA<sup>3</sup>の写字生が下している解釈は、私には全体的に的を射ているとは思えない。この言葉でもってグレゴワールが、単なるコピーの仕事ではなく自由な模造を示したことは大いにありえる。最初の自由な改作を認めることへは、グループ全体を検討することによって導かれる。当然ながらグレゴワールの中に最初の簡潔なフランス語コピー、すなわちジャン・ド・セポワからフランス王シャルルに贈られたコピーの著者を見ることが可能である。

彼については何も発見できなかった<sup>27</sup>。その仕事は多分1308年に果たしたのであろう。あるいは少なくとも、マルコがすでにプロローグで明らかにしていた著述の日付けを繰り返し、グラン・カアンについて述べている個所でのDのヴァリエーションは、そうした意味で年次を示唆していると考えられるのではないと思われる。すなわち、「彼は統治し始めて現1298年までに42年になる」<sup>6\*</sup>に対してDは、「現今のクリストの1300と8年までに」とある。機械的な日付、単なるうっかりミス、これについては他の写字生は皆簡単に気がついたに違いない（なぜなら、もちろんより後世のものであるDの非意志的な日付ではありえないから）。これをそのまま残しているDの写字生は、事実その仕事の残りにおいてもかなり鈍感であったことを暴露している。

1308年にはティボーはまだフランスに戻っていないが、マルコのコピーはすでにそこにあったかもしれない。グレゴワールはこの武人にずっと付き従っていたのかもしれない。

### 5. 様々な下位グループの特性

前に挙げた15の写本がFの一兄弟の改作版から派生したただ一つの家族を構成することは、それら同士と今に残っているフランク・イタリア語テキストと対照すると明らかとなることである。その例として、全ての中で最も簡潔な版であるC<sup>1</sup>のどれでもいいから1章を転記し、Fのテキストが改作されている個所をイタリック体[< >内]で示そう。ここでは我々のテキストの第III章に当たる個所を取り上げる<sup>7\*</sup>：

「そしてソルダイエに<やって来ると>、<彼らはかく考え>さらに前進するするの<がいいように思えた>。で、ソルダイエを發って旅に出、馬を驅ってバルカ・カアンという名の<タルタル人>君主のところ<に>やってきた。この君主は彼ら<を>大歓迎し、その到来を喜び、彼らは持ち来たった宝石を全て彼に贈った。君主はそれを喜んで受け取り、とても大切に<した>。そして、2倍の価値のある宝石を賜った。彼ら<が>この君主のもとで1年もあったとき、バルカ[ベルケ]と東タルタル人の君主アラン[フラグ]との間に戦争が起った。<彼らは双方とも大軍を作った。が最後に、西タルタル人の君主バルカが敗北した。>そして双方とも、<多くの者が死んだ>。<かくて><この戦争の>ため、捕まらずしては誰も道を進むことはできなかつた。彼ら<が>やってきた道には<そのような危険があった>。<で、前へは誰でも安全に進むことができたが、後ろに戻ることはできなかつた。>そのため、<これら2兄弟には、後戻りできないからさらに前進するほうがいいように思えた>。こうしてバカカのもとを發ち、西の君主の国の果てにあるオウカカという名の町に<来た>。そしてオウカカを發って、ティグリの<大>河を渡り、16日行程の長さの砂漠を進んだ。<野に草をはむ>家畜で暮らすテントの中のタルタル人以外には、町も城塞も見られなかつた」

書き手の違いによる避け難い異なりは別として、この文章は、この章を有する12の写本において<全て>本質的に同じ形で現れる（B<sup>6</sup>・B<sup>7</sup>・C<sup>4</sup>は、このグループに属することは疑いないが、この個所をもっていない）。Fに対する異なりはすべてに共通する。Fと較べて同じ削除（F： *iront encore plus avant* 「<さらに>前進する」、*et que vos en diroie* 「で、これについて皆さんに何をお話しましょうか」、*qu'il ne trevent aventure que a mentouvoir*



face「特に述べるべき出来事に会うことなく」、il les envoya a parer en plosor partie e furent mout bien pares「彼らはそれをいくつもの地に送って売ったが、とてもよく売れた」、il se combatirent ensenle「彼らは激しく戦った」、il i s'aparoillent「彼らは支度を整えた」、節の同じ移動(et hi ot grant maus「大きな被害を被った」、16-18行の同じ大幅な短縮、同じ追加(ティグリのgrant<大>河、qui pessoient es chans<野に草をはむ>)がある。

この章から得られる観察は、グレゴワールの作品全体に適用できる。オリジナルテキストの大部分は、何らかわづかな言語的手直しは伴うがけっこう忠実に再生されている。しかし、重苦しい場面転換の語句は好んで犠牲にされ、余りにも込み入っていたり古めかしい構文は慣用句やより身軽な文章で置き換えられ、意味のいささかはっきりしない箇所は大きく短縮されるかまさに切り捨てられている(改作者は第9行のparer<売る>も18行のtraesse<回り道>も理解できなかったのだと思う)。書き直しは大雑把な近似化に甘んじることになり、それは時として、マルコの本来の考えを偽って伝えている。原文 demoirer auques<しばらく滞在する>がvenir<来る>に、en la tere de Barca<バルカの地に>がavec ce seignor<その君主とともに>となっているのがそれである。

このグループのどの写本も完本ではない。A<sup>1</sup>・A<sup>2</sup>・A<sup>3</sup>・Dは我々のテキストの第CCVI章の最初の数行の後で中断している。A<sup>3</sup>とDは、それぞれの写字生によって自らの捏造になる結びでもって完結されているが、誰の目も誤魔化せない。C<sup>1</sup>・C<sup>2</sup>・C<sup>3</sup>は我々の第CCV章のほぼ真ん中で留まっている。B<sup>1</sup>・B<sup>2</sup>・B<sup>3</sup>・B<sup>4</sup>は、我々の第CCII章で閉じている(B<sup>5</sup>は1枚欠落があるに違いなく、ほぼ確実に同じ閉じ方をしていた)。ティボーが持っていた稿本が最後に欠落していたのか、それともグレゴワールの改作が未完に終わったのか。そのどちらの場合も退けられないが、大いにありえらと考えることもできない。A・D・C、すなわち欠落がより少ないグループでの物語の断ち切れ方は、最後の数葉が偶然になくなったことを考えさす。グループBはカイドウの娘の章で終わっているが、それが偶然ではなく、最後の重い数章を意図的に切り捨てたのだとしても、その歴然とした欠落がA・D・Cと共通していることは、いずれにしてもこの欠損が極めて早い段階で生じたことを証明するに充分である。

失われた中間写本の数がいくつであれ、今に残っている写本は、すでに述べたごとく四つの異なるグループに分かれる。これら異なるグループ間にどのような親戚関係があるのか、失われたオリジナルの復元のためにそれぞれどのような重要性をもつのか、各グループの祖本に対してそれを構成する個々の写本はどのような価値を有しているのか、これらは今まで批評家たちによって明確にされたことはなかった。

ポーチェが知っていたのは三つの写本、すなわち我々のA<sup>1</sup>・A<sup>2</sup>・B<sup>4</sup>だけであり、それを自分の版に用いた。最初彼は自分のテキストの底本としてB<sup>4</sup>を採用したが、転記が終わってみると、A<sup>1</sup>とA<sup>2</sup>の方が「より古く、文体もより古めかしく見える<けれども>」(p.XCIII)、それよりはるかに優れていると思えた。それでA<sup>1</sup>に決め、それがf.59bに呈している大きな欠落を埋めるためと、自分のテキストに研究資料の体裁を施すために、A<sup>2</sup>を用いた。B<sup>4</sup>も同じ目的に役立てられた。彼の版は——もっと一貫した正確なやり方で進

められていれば<sup>28</sup>—— $A^1$ のとても有益な出版となっていたことであろう。 $B^4$ の価値および $A^1 \cdot A^2$ との関係については、彼はほんの漠然とした直感すら持ち合わせなかった。

1882年にドリズルは<sup>29</sup>、 $C^1$ のコロタイプ版を複製した折、自分の知っていた六つの写本の「仮」分類でもって、ポーチェの犯した誤りを証明しようとした。彼はそれを次の三つのグループに分けた：1)  $A^1$ と $A^2$ 、同一の写本に由来する 2)  $F$ と $B^4$ 、互いに独立しているが原初の形に極めて近い 3)  $C^1$ と $C^2$ 、第2グループに劣るが第1グループに優る。

G.レノーは<sup>30</sup>、十の写本の分類の試みを行ない、まずaとbの2グループに分け、それをさらに二つに分け (aは $B^1 \cdot B^2$ と $B^4 \cdot B^3$ 、bは $A^1 \cdot A^2$ と $C^1 \cdot C^2 \cdot C^3$ )、稿本Dはbに入れ、同グループの二つの部門のどちらからもそのテキストを得ているとした。『ラテンオリエント協会出版』の中で彼自身がポーロの数章について編纂した批判版の論文に、自分の考えをさらにはっきりと余すところなく発表し、 $B^1$ と $B^2$ に他の写本に対する絶対的な優越を事実でもって認めた。

以上のような様々な試みを不毛のものとした誤りは、今は失われたFGが基づいた原本であるやはり失われた $F^1$ がFの兄弟であったにちがいないことと、様々なグループの間をぬってこの家族の祖本に遡るためにはFとの対校が唯一の客観的な基準である、ということを理解しなかったことにある。<sup>31</sup>

この必須の前提——この家族がFに極めて近い一稿本に由来すること——を認めれば、つまり一貫した対照の相手としてFを採用すれば、この家族自身が惹起する様々な批評上の問題は、その解決が十分に容易なものとなる。個々のグループの同一の特性は、それにはこの家族の様々な構成員内部の対照を確立すれば十分であるが、上に立てたやり方でもってすれば、さらにくっきりしたものとなってくる。しかし、この4グループのどれも単独ではFGはもちろんBすらも復元するに十分でない。Bは、その構成員の数の点でも、それらのいくつかの物質的古さの点でも時にFと一致する忠実さの点でも、全部の中でおそらく最も重要であろう。

Bと残りの家族とのはっきりとした対立と、他のグループとの共通の起源は、私には確実なことに思える。純粋な読みがBだけに残っている場合が頻繁であるのに対して、残りの稿本では一様に変形して現れる。以下いずれもFと一致している例であるが、例えばB「赤い真珠がある」に対して、他の写本では「食べるととても美味しい赤い鶏がいる」(Pauthier p.539)。B「オセアヌ海」に対して、他の写本「西の大海」(p.551)。B「その6日のうちの3日行程で」に対して、他の写本「その3日の後6日行程」(p.523)。B「黒い角」、他の「白い角」(p.570)。B「湾全体に」、他「湾の周囲に」(p.604)。B「すっかり地に」、他「ぐるりに」(p.546)。B「80リーヴル」、他「4リーヴル」(p.522)。B「象より余り大きくない沢山の一角獣」、他「象ほどの大きさでない一角獣も」(p.570)。B「クリストの1285年」、他「クリストの1295年」(p.550)。B「真珠や宝石といった商品」、他「豌豆や宝石といった商品」(p.527)。B「ラクダと馬や男女の奴隷」、他「馬、鞍、武具」(p.503)。B「猫のような毛をした」、他は単に「毛がある」(p.524)。B「空気は夏にはとても腐敗している」、他は単に「空気は腐敗している」(p.401)。Fと一致しない場合でも、Bが我々に提供するヴァリエーションはしばしば他のすべての稿本と異なっている。例えば、

F「9歩」、B「8歩」、他「20歩」(p.523)。F「1269年」、B「1279年」、他「1268年」(p.547)。またこのグループの文体的特徴は、他と比べて十分に个性的であり、私の知る七つの写本のそれぞれにおいて簡単に識別できる。それがどのようなものか理解するには、少し前に掲載したB6の未刊のページを、ほぼ全面的にAから採られたポーチェのテキストと対照されたい。その構成員すべてに共通する典型的な誤りのうちのいくつかのリストは、そうした対照を補い、Bの統一性を決定的に確認するのに役立つだろう(注の代わりに対応するFの個所を参照されたい<sup>8\*</sup>)。

XII 1「2人の兄弟と他の多くの者たちはいかに彼らとともにアークルを発ったか」(F:「二人の兄弟とマルコはいかにアークルを発ったか」) XXIII 3-4「昔は全ての王とともにある印をもって(B<sup>1</sup>・B<sup>2</sup> aves)生まれた」(F:「昔この地方の王は皆肩にワシの印を帯びて生まれて来た」) XXXIII 13「キシとアルクモサまで」(F:「キシとクルモサ[ホルムズ]まで」) LXII 17-9「彼らはその資力に応じて妻を30人かそれくらい娶り、その夫は代わりにそれを自分の妻に与える」(F:「彼らは妻を30人までか、金があるか養えるかに応じてそれくらい娶る。また夫は婚資として資力に応じて妻に家畜・奴僕・金銭を与える」)[以下略]

他にも、このグループが一様に、Fではなく確実にFGに帰しえる読みをさらに崩れた形にしている特徴的な箇所を沢山引くことができるだろう。またそこでは、その最初の写字生の文学的素養のなさや職業上の無能さが、馬鹿げた書き換えの例から確認できる。なぜポーチェが、何よりも自分のテキストの読みやすさを心配して、このグループで唯一知っていた稿本であるB<sup>4</sup>を出版することを止めたかがとてもよく理解される。[つづく]

1\*. Marco polo, *Il milione, prima edizione integrale*, a cura di Luigi Foscolo Benedetto, Firenze Leo Olschi 1928, 'Introduzione: La tradizione manoscritta', Cap. II: Il rimaneggiamento di Grégoire (FG), pp. XXXIV-LX. (1)-(5)はそれぞれ『大阪国際女子大学紀要』24-2, 25-1, 25-2, 26-1, 27-1号。原著の解説は、拙稿「ルスティケッロ・ダ・ピーサ——マルコ・ポーロ旅行記の筆録者」前掲紀要24-2, 1998, pp. 1-48, 参照。原典からの語句および文の引用には、適宜原文とその和訳もしくはその一方を付けた。引用例を省略した場合は、[以下略]等と記した。原註は大幅に省略・要約した。< >内は引用文中イタリック体の個所。[ ]内は訳者補足。\*は訳註。ローマ数字は上記ベネデット校訂版Fの章(アラビア数字は同行: es. XVII 3-5)。

## (原註)

1. これらのうちA<sup>3</sup>・B<sup>5</sup>・B<sup>6</sup>・B<sup>7</sup>の四つは、コルディエーユールのリストに挙がっていない。
2. F.1rには今も1682年のカタログの番号10260がある。
3. この書き出しを転記した際ポーチェ (p.3, n.1) は、contrefais<作り直す>をcontrescris<書き直す>に変えている。
4. 旧番号: 8392(Omont, IV, 83), 42(III, 5), 81(II, 469)。

5. 同写本の265の細密画の複製へのH. Omontの序文参照：*Reproductions de manuscrits et miniatures de la Bibl. Nationale*, fasc. XII, 1907, pp.1-6.
6. この稿本は次の書で美術の観点から検討されている：A. De Champeaux – P. Gauchery, *Les travaux d'art exécutés pour Lean de France duc de Berry avec une étude bibliographique sur les artistes employés par ce prince*, Paris 1894, pp.153-4.
7. 旧Hist. 8145 B.
8. この興味深い女性については：Max. De Montmorand, *Anne de Granville, sa vie, son oeuvre, sa postérité*, Parigi 1917.
9. Louis Malet de Graville; cfr. Anselme, *Hist. xéxéalogique et chronologique de la maison royale de France*, t. VII, pp.865-6.
10. Cfr. F. G. Warner – J. P. Gilson, *Catalogue of western manuscripts in the Old Royal and King's collection*, t. VII, 1921, pp.339-41.
11. Cfr. F. Madan – H.H.E. Craster, *A summary Catalogue of western manuscripts in the Bodleian library at Oxford*, t. II, part 1a, 1922, pp.381-2.
12. Cfr. J.R. Sinner, *Catalogus codicum manuscritorum bibliothecae bernensis*, t. II, Berna 1770, pp.419 sgg.
13. この文章に施すべき訂正ならびにこれの歴史的価値については、本章第5節で述べる。G. Bianconi, *Degli scritti di Marco Polo e dell'uccello <Ruc> da lui menzionato*, Bologna 1862, p.27は、このベルン写本を1307年のものと誤っている。
14. この存在を知ったのは下記より：J. Senebier, *Catalogue raisonné des manuscrits conservés dans la Bibliothèque de la Ville et République de Genève*, Ginevra 1779, p.395.
15. L. Delisle, *Inventaire alphabétique des manuscrits latin et fratéais ajoutés au fonds des nouvelles acquisitions pendant les années 1875-1891*, t. I, p.392.
16. 旧H. F. 675. 新旧両番号が記されているため、Cordier-Yule, II, 537-8では2本 (n.21と23) に数えられている。
17. E. Muret, *Un fragment de Marco Polo, in Romania*, XXX, 1901, pp.409-414.
18. Cfr. J. M. Richard, *Une petite nièce de Sain Louis, Mahaut comtesse d'artois et de Bourgogne (1302-1309)*, Parigi 1887.
19. 「教皇の下に派遣されたタルタル人の使者について」と題してマルコに言及されている箇所は引用に値する (cfr. Martène et Durand, *Thes. nov. anecdot.*, III, 746 sgg.). [訳注：旅行記中の、ニコロとマフェオがフビライから教皇のもとに派遣され、マルコを伴って再びそのもとに至った経緯を述べる箇所 (ラテン語) が引用されているが、略する。人名の綴りが注目される：Cobilaazan, Alahonis, Chaam, Catagal, Bendocheur等]
20. この綴りChépoysは、Chevalier, *Répertoire des sources historiques du Moyent-Âge – Topo-bibliographie*, より。
21. 原文は3写本とも lui desiderans <彼は・・望み>とあるが、私には受け容れ難く、luiはbñ (bien) <強く (望み)>を読み誤ったものであろう。
22. J. Petit, *Un capitaine du règne de Philippe le Bel, Thibaut de Chépoys*, in «Le Moyen âge», 1897, X, pp.224-39.
23. 1850年10月25日のアカデミー講演：*Nouvelles recherches sur les premières rédactions des voyages de M. Polo*, pp.11-12 (抜粋)。
24. Bianconiの最初の批判は、《Études religieuses historiques et littéraires par des PP. de la Compagnie de Jésus》, N. S. VIII, 1866, pp.394-403のC. Cahierの論文に公開書簡の形で発表された。それに対するPauthierの反論は、《Annales de philosophie chrétienne》, febr. 1866, pp.16-51. それに対するBianconiの再批判は、《Memorie dell'Accademia delle scienze dell'Istituto di Bologna》,

- 2a serie, t.II, 1868.
25. ポーチェには、テキストの信頼性をその言語の正しさから測ろうとする固定観念があり（「文献学者でもない—近代人にも読める」）、ピアンコーニに対して、これはフランス語のテキストだからイタリア人で自然科学の教授である者は審判としてふさわしくないと言う。
26. Langlois, *art. cit.*, pp.256-7.
27. Bianconiはこの正体不明の改作者について、「この仕事をなした者は、無能ではないし単なる書家でもなさそうだ」(p.27)。私も‘聖職者’だと思うが、1300年代初頭の多数の‘故グレゴリウス’の中から特定することは不可能である。
28. 三つの稿本のどれに従ったか、またA<sup>1</sup>の読みでなく他の読みを採った場合その理由は何か、必ずしも常に示されていない。A<sup>1</sup>にありながら捨てるを得なかったヴァリエーションについて、あまりにも口をつぐんでいる。自分がその優越性を認めたい稿本の、時として極めて重大な欠陥を無意識に隠したかったがためであろう。[引用例略]
29. Delisle, *Bibliothèque de l'École des Chartes*, 1882, p.235
30. G. Raynaud, in *Romania*, XI, pp.429-30; *Publications de la Société de l'Orient latin, Serie geografiva*, III, pp.213-26.
31. FGの優越性に対するその盲目的な信頼にもかかわらずポーチェは、結構何度も自分のテキストの検証にFを引く必要を感じている(pp.127, 149, 421, 449, 498 ecc.)。P.721では自分の写本の欠落の穴埋めに、p.305では訂正にFを用いざるを得なくなっている。

(訳注)

- 2\*. *Le livre de Marco Polo*, par M. G. Pauthier, Paris 1865.
- 3\*. 以下にその4本の「書き出し」と今に残る記録の紹介があるが、省略する。
- 4\*. 以下9ページにわたってその転記が掲げられるが、省略する。内容的には、チベットの章から帰路の最後ホルムズの章までを断続的に要約したものである。
- 5\*. ティボー・ド・セボワがヴェネツィアに派遣されたのは1305年。翌年末同市と同盟を結ぶことに成功している。彼のフランスへの帰国の時期は詳らかでない。「ロマーニア」問題とは、かつて十字軍によって征服され(1204年)その後ギリシア人によって奪回された(1261年)コンスタンティノープルおよびギリシア領土(ロマーニアと呼ばれた)の所有権と継承権をめぐる争い。
- 6\*. 本文中第LXXVII章「グラン・カアンとナヤンの戦いについて」(F. p.66)。
- 7\*. ローマ数字は以下全て、ベネデット自身の校訂になるFの章を指す。
- 8\*. 原文では対応するFの箇所は引かれていないが、ここでは括弧内に挙げる。